

# 指導資料

鹿児島県総合教育センター

## 社会 第120号

—小・中学校対象—

平成24年10月発行

### 「活用する力」を育成する社会科の授業 ～「基礎・基本」定着度調査等の活用を中心に～

平成23年10月発行の「指導資料」（社会第117号）では、「基礎・基本」定着度調査を活用した社会科の授業改善について、「本（「基礎・基本」定着度）調査においても『活用に関する問題』について議論することをおして、『活用する力』についての定義を明確にするとともに、その力を育成するためにはどのような授業が求められているのかを具体的に提案していく必要がある。」ことを指摘した。<sup>1)</sup>

そこで、本稿においては、社会科における「活用」について考察するとともに、「活用する力」を育成する授業等について提案する。

#### 1 社会科における「活用」

##### (1) 「資料活用」と「活用」の関係

中学校社会科の評価の観点には、「資料活用の技能」が位置付けられ、その趣旨として「社会的事象に関する諸事象から有用な情報を適切に選択して、効果的に活用している」と示されている。

まず、「資料活用」と「活用」の関係を整理する。

兵庫教育大学・㈱ベネッセコーポレーション共同研究プロジェクト報告書「活用型学習の指導方法及び評価方法等の研究」

では、「資料活用」と「活用」は部分的な包含関係にあること（図1参照）を以下のように述べている。<sup>2)</sup>

Iの部分は、知覚による判断から知識を知る事実認識である。資料から情報を読み取り、情報を収集する。

IIの部分は、知識や情報を駆使して、資料に明記されていない情報と情報の関係を推論を働かせ、関連付けて理解に到達する。

IIIの部分は、子どもが自前で獲得した概念装置<sup>3)</sup>を活用することで、知識を転化し、他の事例に対して知識や技能を適用・応用する。

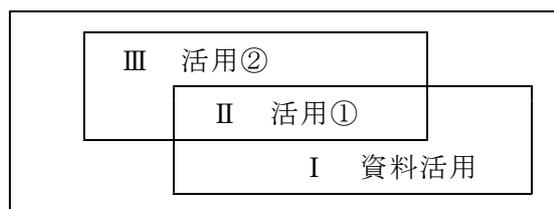


図1 「資料活用」と「活用」の関係図

##### (2) 「活用」の捉え方

本稿では、「活用」を学習活動と捉え、以下のように整理する。

ア 生活経験や学習経験で習得した知識や技能を利用したり、まとめたりして理解を深める。

イ 習得した知識や技能を他の事例や類似事例に適用して、理解を深める。

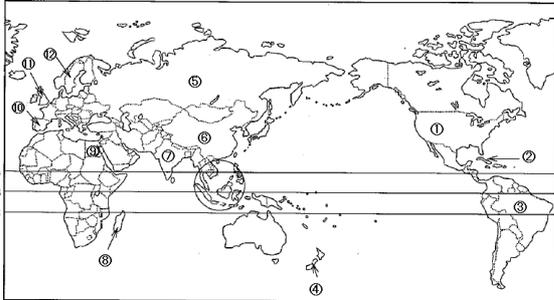
ウ 理解したことを論理的に記述する。

## 2 「基礎・基本」定着度調査問題の分析

上記1の整理に従い、「基礎・基本」定着度調査問題を分析する。

### (1) 「資料活用」を問う問題

(資料2)



(5) 資料2の①～⑫の各国において、次の三つの文の全てにあてはまる国はどこか、①～⑫から一つ選び、番号で答えよ。

(資料3)

- ・まわりを海で囲まれた島国である。
- ・日本との時差は、9時間である。
- ・資料3はその国の国旗である。



※ イギリスはサマータイムを設定しているため時差が8時間の期間もある。

図2 調査問題の一部(平成22年度中1)

図2は、地図を参照して「まわりを海で囲まれた国」、「日本との時差が9時間の国」、「示された国旗をもつ国」の条件を満たす国を選択させる問題となっている。最初の条件は、島国を地図中から選択するものであり、事実判断により②、④、⑧、⑪の4国に絞り込む「資料活用」を行わせている。

次の条件の「日本との時差が9時間」であることは、地図に経線が記載されていないため、経度15度につき1時間の時差があるという知識を活用するなど、難易度の高い設定となっている。

しかし、「資料3はイギリスの国旗である」という知識があれば、既習知識や技能を活用することなく答えに到達することができる。

よって、この問題は、条件を複数提示

しながらも、最後の条件によって地図中からイギリスを選択する事実判断を行わせる「資料活用」を問う問題であると分析できる。

### (2) 「活用」を問う問題

12 次の2つの写真のように、食品には、産地や原材料について詳しい情報が書かれています。それらの情報は、どうして大切なのでしょうか。買い物をする人や消費する人の立場になって、その理由を□の中に書きましょう。



図3 調査問題の一部(平成23年度小5)

図3は、2枚の写真から事実判断によって読み取った情報を、その情報が消費者にとってなぜ大切なのかを、論理的に記述させる問題となっている。具体的には、「野菜の生産者の名前と生産地の明示」、「遺伝子組み換えでない無農薬栽培の大豆を使用」、「ポークソーセージの原材料の明記」などの安全性に関する情報を児童は読み取る。そして、消費者は価格や商品の量など、他の要素と比較しながら、自らの消費行動を決定していることなど、児童が理解したことを論述する「活用」を問う問題となっている。

このように調査問題を分析し、「活用」を問う問題を推定することによって、授業において児童生徒にどのような思考が求められているのかを把握することができ、授業の改善が可能になる。

## 3 「活用する力」を育成する授業

- (1) 生活経験や学習経験で習得した知識や技能の「活用」

「活用する力」を育成するには、児童生徒に意志決定を行わせる授業が有効である。

ア 複数の選択肢からの選択及び価値判断（単元終末時）

生活経験や既習内容等の知識や技能を総動員して、選択や価値判断する対象についての利点や欠点などを話し合うことを通して、結論ではなく、そこにいたる判断過程を重視することにより、知識や技能を「活用」することを豊かに保証することができる。

例えば、ごみのリサイクルについて「ガラス瓶、ペットボトル、アルミ缶、スチール缶、紙パックのどの容器に入ったジュースを購入するか」や地球環境の保全を学んだことを生かして「自動車を購入するなら、ディーゼル、ガソリン、ハイブリッド、電気のうちのどの動力源を選ぶか」などが考えられる。

イ 提案による思考の伸長

「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」に紹介されている地理的分野の単元「コンビニエンス・ストアをどこにつくればよいだらう」の実践では、身近な地域の様々な事象の分布図を作成させ、関係性を追究させることから、日常経験も「活用」しながら立地に関する概念を習得していく展開が報告されている。<sup>4)</sup>

ウ パフォーマンス課題の設定

横浜市立並木中学校の三藤あさみ教諭は、中学校公民的分野「わたしたちと政治」の単元において、「民主的な国家を提案しよう」というパフォーマンス課題を単元末のゴールに位置付け、ルーブリックの設定や検討会の実施な

どによって、生徒が習得した知識・技能の「活用」を図っていることを報告している。<sup>5)</sup>

(2) 習得した知識や技能の類似事例や他の事例での「活用」

小学校の第3・4学年では、主に地域を学習する。例えば、「ごみの処理」の単元では、身近なゴミステーションや清掃車の観察、地域の清掃工場の見学等を行い、ゴミ処理が計画的に進められ、健康な生活や良好な生活環境の維持と向上に役立っていることを理解させることになる。

ここで習得した知識は、事例として扱った市町村のごみ処理に関する概念だけでなく、他の市町村、他の都道府県でも通用する一般概念となっている。そこで、例えば教科書に掲載されている事例や、転出入した児童が居住する市町村の事例等に、習得した概念を適用させる授業は、児童が習得した知識や技能を「活用」することになり、理解が深まるとともに、学んだことが生かせるという実感をもつことにもつながる。

同様に、小学校第5学年の「自動車工業」で学んだ概念を、他の教科書に掲載されている事例に適用したり、中学校地理的分野「日本の諸地域」の単元で、先行して学習した地域で学んだ視点を、他の地域に適用して考えるなど、小・中いずれの学年においても授業を構想することができる。

(3) 理解したことの論理的な記述

社会科では、習得すべき概念を「なぜ」という問いの答えとして、児童生徒が自ら理解する過程が大切である。

授業では、思考する時間と記述させる

時間を確保するとともに、論理的に発表できる指導を行うことが肝要である。

上記(1)及び(2)で提案した授業の構想は、いずれも児童生徒が理解したことを論理的に記述させることによって、知識や技能が「習得」されたのか、「活用」されたのかを的確に評価することができる。

(4) 全国学力・学習状況調査問題の活用

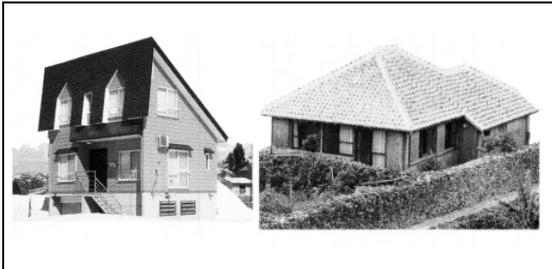


図4 調査問題の一部（平成22年度小6「国語B」）

図4は、国語のB問題に使用された写真で、屋根の角度の違いを示している。この内容は、自然条件にあわせた暮らしとして小学校第5学年の社会科でも学習している。そこで、この調査問題を授業で扱ったり、問いを練り直して写真を資料として扱ったりすることが可能である。

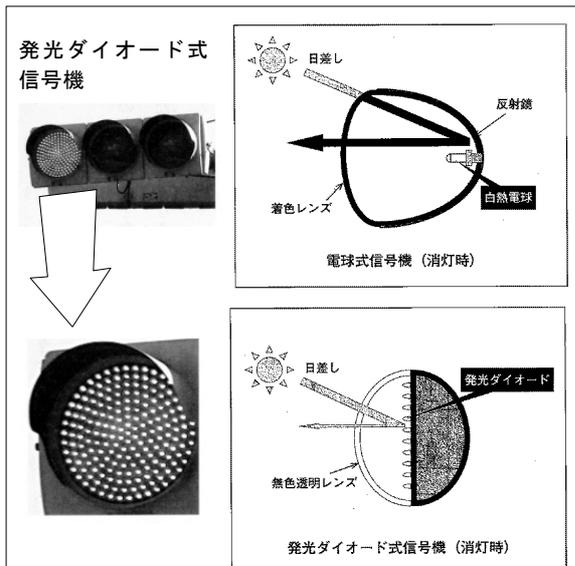


図5 調査問題の一部（平成21年度中3「国語B」）

上記以外にも、発光ダイオード式信号機

の写真や図、電球式信号機の図などを資料（図5）として準備し、小学校第4学年「交通事故を防ぐ」において、なぜ、「電球式信号機から発光ダイオード式信号機に変わったのか」について説明させる授業も構想することができる。

本稿では、社会科における「活用」と「資料活用」との関係を示し、「活用」を学習活動として整理した。また、その整理に基づき「活用する力」を育成する授業の構想について、具体的な事例を示しながら述べた。

「基礎・基本」定着度調査及び全国学力・学習状況調査の問題の意図やその趣旨を生かした「活用する力」を育成する授業が展開されることによって、本県児童生徒の基礎学力の向上がより一層図られることを期待したい。

一註及び引用文献一

- 1) 指導資料, 社会第117号『「基礎・基本」定着度調査を活用した社会科の授業改善についての具体的提案』, 鹿児島県総合教育センター, 平成23年10月, P. 5.
- 2) 「活用型学習の指導方法及び評価方法の研究」, 平成22年3月, P. 159. なお, 図1については, 本書で示された図を参考に, 筆者が整理して示した。また, 本書では, 「知識を利用する」, 「知識を活かす」, 「知識を当てはめる」, 「知識を比べて考える」, 「知識をまとめて表現する」など, 授業過程での具体的な学習活動も明示している。(P. 6.)
- 3) 岩田は, 「社会科の場合には, 地理学, 歴史学, 政治学, 経済学, 社会学などの社会諸科学から抽出された法則性や概念を組み立て概念装置をつくっていく。この法則性や概念は, なぜという問いに対する説明として形成される。児童・生徒はこの種の問題や法則性を社会科授業の中で形成していく。」と述べ, 社会事象が見えるようにするためには, 概念装置の形成が必要なことを説いている。岩田一彦, 「小学校社会科 学習課題の提案と授業設計-習得・活用・探究型授業の展開-」, 明治図書, P. 21.
- 4) 文部科学省, 「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」, 教育出版, 平成23年5月, PP. 49-50. なお, 小学校版も平成23年10月に刊行されている。
- 5) 西岡加名恵, 田中耕治, 「『活用する力』を育てる授業と評価 中学校 パフォーマンス課題とルーブリックの提案」, 学事出版, 平成21年6月, PP. 34-45.

(教職研修課)